

足音

沖縄県立球陽高等学校一年 徳元 陽菜

私は曾祖父の顔を知らない。会ったこともなければ、写真を見たこともない。なぜなら、曾祖父は七十四年前の沖縄戦で、妻とお腹の中の子を残して戦死したとされているからだ。遺骨や写真さえも手元に残っていないため、彼の生きた証は証言としてしか残されていない。しかし、だからといって、彼を「戦没者」とひとまとまりにすることや、曖昧な表現で記すことには違和感を感じていた。「家族のためにも曾祖父の足跡をたどろう。」私の挑戦が始まった。

私は曾祖父の足跡をたどり、彼が戦死したとされる前田高地へと向かった。前田高地とは、浦添市前田の浦添城跡がある丘陵のことだ。眺めがよく、戦争をする上では有利な地であったため、アメリカ軍と日本軍の「ありつたけの地獄を一つにまとめた」激戦が行われることとなった。この激戦の中、曾祖父は命を落としたのだと戦没者名簿には記されている。十五年前、祖父が前田高地を訪れたときは、ガマに地面が見えなくなるほどの遺骨がころがっていたという。しかし、この五千体もの遺骨の中から曾祖父を探し出すことは簡単なことではない。祖父は二年前にDNA鑑定をして遺骨の判定を申し込んだが、「該当しない」という結果が返ってきたそうだ。曾祖父の最期の地とされる所に行ったものの、逆に遠ざかっていくような気がした。少し寂しい気持ちになった。

そんな中、私は曾祖父の甥にあたるおじさんから、曾祖父の唯一の生きた証である「証言」を聞くことができた。曾祖父は、仲間に「米軍との戦いは、まだ始まっていないから家に帰ろう。」と言われても「日本が勝ったら自分たちは逃走兵として処刑されてしまう。」と言って拒むような真面目な青年だったこと。甥のために十キロの山道を歩いてミルクを買ってきてくれたり、入隊する直前には足が不自由なおばあさんをおぶって避難小屋まで連れていったりした優しい青年だったこと。話を聞いていくうちに、戦争が真面目な心を踏みしめるものだという無念さを感じるとともに、曾祖父の祖父にも似た真面目で温厚な人柄を知り、少し近づけた気がした。

なぜ私たちは平和学習に取り組むのだろうか。私は平和学習で配布された穴埋め式のワークシートに疑問を抱いた。まるで提出するための課題ではないか。はじめは友人と答えを探しながら展示室を見て回っていたものの少し息苦しくなってしまう。平和学習とは、戦争の記録を学ぶだけでなく、学んだことを通して自分の考えを持ち、現在の社会やこれからの社会をよりよいものにするための方法を考えることなのではないだろうか。受け身に捉えるのではなく、自ら疑問を持って新たな発見を探していくことで、平和学習は「むごい戦争の歴史を学ぶ怖いもの」から「平和な未来を創るための第一歩」と捉え方を変えることができるだろう。そして、今の私にとっての平和学習とは「自分のルーツを知ること」なのである。

曾祖父の足跡をたどっていく間、私には二つの目標が芽生えた。一つ目は、アメリカ目線で見た沖縄戦について学ぶことだ。私はアメリカの学生がどのように沖縄戦を学び、その歴史に対してどのような意見を持っているのかを知りたい。アメリカ目線で沖縄戦を語ることは未だに肯定されていないと感じるが、私は米軍目線で描かれた沖縄戦の映画を見て証言や記録が忠実に再現されていると感じ、感銘を受けた。戦時中は敵同士だったとしても、平和への思いは同じなのだと言われ、強く言い聞かされたような気がした。沖縄戦で辛い思いをした方は数えきれないほどいて、その中で人種や国籍は区別されるべきではないのだ。だからこそ、沖縄戦を違う視点で見つめる勇氣も必要だ。二つ目は、沖縄戦の証を残しておくことだ。前田高地を訪れたとき、浦添城跡として城を復元するか、ガマを残すために城は復元しないで議論をしているという話を伺った。私は、負の遺跡だと言われたとしても、後世にガマをそのままの形で残したい。沖縄戦の歴史を、辛いもの、怖いものといって蓋をするのではなく、平和な心を広げていくために語り継いでいくことが大切だ。

今の私にできることは、家族の歴史を学び、伝えていくことだ。曾祖父の足跡をたどることは重く恐ろしい過去を知ることである。実際、私は沖縄戦での写真や沖縄戦を描いた映画を見て、あまりにショックを受け、涙が止まらなくなったことがあった。しかし、曾祖父が繋いだ命のバトンを受け取り、辛い過去にも向き合っていくことで、家族を一つにすることができると信じている。今日も私は耳を澄ます。おじいは今、どこにいるの。